

むかし、ある村に、古いお寺がありました。このお寺は、これまで、いくら住職が入っても、化け物に食べられてしまいました。それで、だれも住まず、荒れ果てていました。

ある日、旅の坊さんが、たずねてきて、村の人に、

「どこかに宿はないかな」とききました。村の人は、

「いやあ、宿はどこにもないが、むこうに荒れた寺がある。そこならなんぼでも泊まれるが。まあ、庄屋さんそこへ行つてたずねてみなさい」といいました。

坊さんが庄屋さんの所に行くと、庄屋さんは、

「あその寺は空いているから、なんぼでも泊まってくれていいが、昔から化け物が出るといつて、いくら住職を入れても続かないのだ。悪いことはいわないから、あそこには泊まらないほうがいい」といいました。坊さんは、

「それは心配ない。どんな化け物が出るか知らないが、わしは大丈夫だ。泊めてもらおう」といって、そのお寺に泊まりました。

坊さんは、

「本当に化け物が出るんだろうか」と思いながら、ご飯をたいて食べて、夜になると、ふとんに入りました。

夜中ごろになると、本堂のほうから、生臭い風が、そよそよそよそよ、そよそよそよそよと吹いてきました。

「何だか顔が、生温かいような冷たいような気持ちができる。こりや、ほんとうに化け物が出るかもしれん」

坊さんは、そう思って、横になったまま念仏を唱えていました。

やがて、屋根裏から、メキメキメキメキ、ベカベカベカと音が聞こえて来ました。

「いよいよ化け物が出るぞ」と思っていると、家鳴りがし出して、家がめかめかめかめかめか、ぐらぐらぐらとゆれだしました。坊さんは、どんな化け物が出るか見てやろうと思って、念仏を唱えながらじっとしていました。まもなく、ドカーンと大きな音がしたかと思うと、二階から大きな青坊主が降りて来ました。坊さんがふとんの端から頭をちよつと出して見ていると、青坊主は、いろり端にすわって、火を起こし始めました。そして、火が燃えだすと、毛むくじやらの足をにゅうと出して、いろりをまたいで温まりはじめました。

しばらくすると、戸をトントンとたたいて、だれかがやって来ました。そのだれかは、

「てえてえ小法師はうちにかや」といいました。青坊主が、

「ああ、おるわい。どなたでござる」ときくと、

「わたくしは、とうやのばずでござる。風の便りに聞きますれば、こなたには、よいお肴が参りましたそうで。ほうちようのそべらのひとかけらでも、いただきたいと思うて

参りました」といいます。

「ほう、よう来られた。まあ入ってあたりつしやれ」と、青坊主がいうと、戸口から、大きな坊主が入って来ました。そうして、青坊主の前にすわって、火にあたりはじめました。

しばらくすると、戸をトントンとたたいて、また、だれかがやって来ました。

「てえてえ小法師はうちにかや」

「ああ、おるわい。どなたでござる」

「わたくしは、なんちのじゆずでござる。風の便りに聞きますれば、こなたには、よいお肴が参りましたそうで。ほうちようのそべらのひとかけらでも、いただきたいと思うて参りました」

「ほう、よう来られた。まあ入ってあたりつしやれ」と、青坊主がいうと、戸口から、また、大きな坊主が入って来ました。

またしばらくすると、戸をトントンとたたいて、だれかがやって来ました。

「てえてえ小法師はうちにかや」

「ああ、おるわい。どなたでござる」

「わたくしは、さいちくりんのけいさんぞくでござる。風の便りに聞きますれば、こなたには、よいお肴が参りましたそうで。ほうちようのそべらのひとかけらでも、いただきたいと思うて参りました」

「ほう、よう来られた。まあ入ってあたりつしやれ」

とうとう、大きな坊主が三人もやって来ました。坊さんが、

「こりやあ、えらいことになったぞ」と思っで見ていると、また戸をトントンとたたく音がします。

「てえてえ小法師はうちにかや」

「ああ、おるわい。どなたでござる」

「わたくしは、ほくさんのびやつこでござる。風の便りに聞きますれば、こなたには、よいお肴が参りましたそうで。ほうちようのそべらのひとかけらでも、いただきたいと思うて参りました」

「ほう、よう来られた。まあ入ってあたりつしやれ」

坊さんが、ふとんの中で、

「何とか退治してやらにやあ。こりやあ、どうしたもんだろうな」と思っで見ていると、坊主たちは、

「よい頃合いになりました。ぼつぼつ料理にかかろうじゃありませんか」といって、おくから大きなまな板と包丁を出して来ました。

「だから料理を始めましょう」

「わたしがいちばん先に来たから、わたしから始めましょう」

そういうと、最初にやって来た坊主が、まな板を包丁の背でカンカンとたたいて、坊さんに向かってさげびました。

「こりやつ、こじき坊主、これへ出え。わしはどうやのばずだ。これより料理してつかわす」

坊さんは、自分が料理されるのかとびつくりしましたが、こういい返しました。

「どうやのばずとは、いかなる者が名を付けた。これより東にあたって、広い広い野原がある。そこに転じておる馬のしゃれこうべが、人を取って食うこたあならん。後（あと）へ引け」

どうやのばずは、

「この坊さん、どうもわたしの手に合いません。どなたか料理していただけませんか」といつて引つ込みました。すると、片目のすごい坊主が前に出て、まな板をガンガンとたたいて、さげびました。

「こりやつ、こじき坊主、これへ出え。なんちのじゆずが、料理してつかわす」
坊さんはいいい返しました。

「なんちのじゆずとは、いかなる者が名を付けた。これより南にあたって、大きな用水池がある。その池の中にすんどるコイの片目が、人を取って食うこたあならん。後へ引け」

なんちのじゆずも、

「こりゃあ、わたしの手にも合いません。どなたか料理していただけませんか」といつて引つ込みました。

すると、つぎの坊主がまな板をたたいてさげびました。

「こりやつ、こじき坊主、これへ出え。さいちくりんのけいさんぞくが、料理してつかわす」

「さいちくりんのけいさんぞくとは、いかなる者が名を付けた。これより西にあたって、大きな竹やぶがある。それにすんどるにわたりの三本足のごときが、人を取って食うこたあならん。後へ引け」

さいちくりんのけいさんぞくは、よろけて、

「もうわたしの手にはあいません。ほくさんのびやつこ殿、あなたが料理してください」といいました。

すると、白いひげの大きな坊主が、まな板をカンカンとたたいてさげびました。

「こりやつ、こじき坊主、これへ出え」

坊さんが黙って見ていると、また、まな板をたたいてさげびました。

「こりやつ、こじき坊主、これへ出え。ほくさんのびやつこが、料理してつかわす」

「ほくさんのびやつことは、いかなる者が名を付けた。これより北にあたって、大きな山がある。それへすんどる古ぎつね。おまえらごときが、人を取って食うこたあならん。後へ引け」

「いや、こりゃあわたしの手にも合いません。こうなれば、てえてえ小法師殿に願ひするよりほかにありません」

てえてえ小法師は、衣を巻き上げたすきをかけ、はちまきしめて、

「それなら、うちに泊まったやつだから、わしが料理して食わせてやろう」といいました。そして、まな板を、ガンガンガンとたたいて、さげびました。

「これなるこじき坊主。これへ出え。てえてえ小法師が料理してつかわす」
坊さんはいいい返しました。

「てえてえ小法師とは、いかなる者が名を付けた。このお寺が建ったおり、棟上げに使った木槌が、人を取って食うこたあならん。後へ引け。消えてしまえ、おまえら」

すると、坊主どもは、

「こりゃあかないません。とても今日は料理はできません。またにしましょう」といつて、みな消えてしまいました。

旅の坊さんは、

「いやあ、ほんに、えらい化け物がたくさん出た。だが、これで出つくしたろう」といつて、寝てしまいました。

つぎの朝、東の空が白むころ、外のほうで、わいわいわいわい、声がありました。坊さんは、

「こりゃあ、また出たかな」と思つて、障子をすつと開けてのぞいて見ました。すると、村の人たちが心配して、おおぜいで、すきをかついだり、かまを持ったりして、集まっています。

「坊さん、坊さん、どうだったかい」

「いや、どうもしない。いい宿を貸してもらつて、よく寝た」

「化け物が出なかつたか」

「出ないどころか。出た、出た。けれど、たいした化け物じゃあなかつた。みなさん、せつかくすきやかまを持って来てるのだから、手を貸してくれ。化け物を退治してしまおう」

そこで、村の人たちが手伝いをして、化け物を退治することになりました。坊さんは、
「ここから東にあたつて、広い野原があるだろう。そこに大きな馬のしやれこうべがあるはずだから、さがして来てくれ」といいました。村の人たちが行ってみると、なるほど、大きな馬のしやれこうべが見つかったので、掘りだしてかついてもどりました。

坊さんは、

「それから、ここから南にあたつて、大きな池があるだろう。そこに、片目のコイがいるから、取って来てくれ」といいました。村の人たちが行ってみると、大きな片目のコイがいました。コイは、あっちへ逃げこっちへ逃げして、なかなかつかまりません。網を持って来て、みんなでようやくつかまえました。

坊さんは、

「こんどは、西の方の竹やぶに、三本足のにわとりがいるから、つかまえて来てくれ」といいました。村の人たちは、竹やぶじゅうを追いまわして、ようやくつかまえました。

坊さんは、

「ここから北にあたつて大きな岩山があるだろう。そこに、年とつた白ぎつねがすんで

いるから、つかまえてくれ」といいました。村の人たちは、鉄砲や弓矢を持って出かけて行き、ようやくのことで古ぎつねをつかまえて来ました。

坊さんは、村の人たちに、

「この馬のしゃれこうべは、東野の馬頭といって、大きな化け坊主。片目のコイが、南池のじゅずといって、これもえらい坊主に化けた。三本足のにわとりが、西竹林の鶏三足といって、大きな化け坊主。この白い古ぎつねが北山の白狐といって、こいつも大きな坊主に化けた。化け物がそろったところで、料理して食おうじゃないか」といいました。そして、馬のしゃれこうべはたたき割って、あとは、コイも鶏もきつねも料理してしまいました。

もうひとつ、てえてえ小法師が残っています。

「この寺の本堂の棟に上がって見てくれ。そこに大きな木槌があるはずだ。そいつがこの寺に住みついておたてえてえ小法師という青坊主だ」

坊さんにいわれて村の人がみんな探すと、古い木槌が見つかりました。それを割ったところ、血がたくさん出ました。坊さんは、

「これで、化け物がみないなくなつた。もうどんな住職が入っても大丈夫だ」といって、出て行くこうとしました。庄屋さんは、

「化け物を退治してくださつたお礼に、あなたが住職になってくださらんか」とたのみました。こうして、旅の坊さんは、そのお寺の住職になつたということでした。

それ昔こつぱり、大山やまのとびのくそ、ひんろうひんろう

原話…『蒜山盆地の昔話』稲田浩二・福田晃編／三弥井書店
再話…村上郁